

令和4年度版

警察職員による

被害者支援手記

警察庁

犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害に遭われた方やそのご家族は、犯罪による直接的な被害だけでなく、その後直面する様々な困難により、言葉にできないほどの辛い思いに長く苦しめられます。そこで、周囲が、犯罪被害者の方々の置かれる状況や心情を受け止め、寄り添い、途切れなく支援の手を差し伸べることが求められます。

この冊子は、全国警察の第一線において、犯罪被害者の方々の支援活動に当たる警察職員から寄せられた「手記」の一部を、警察庁犯罪被害者支援室が取りまとめたものです。

ここに収めた手記には、犯罪被害者の方々がどのような状況に置かれ、どのように苦しんでいるのかの一端が現れているほか、個々の犯罪被害者の方々の声を受け止め、時には共に涙を流しながら、その求めるところに応じて寄り添い続ける警察職員の姿が記されています。

この冊子が、犯罪被害者の方々の置かれる状況や心情への理解を深めるとともに、その周囲の一人一人にできることを考えるきっかけとなることを願っております。

令和五年一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 佐野 裕子

目

次

本当の笑顔を取り戻すために	警察署勤務	巡査部長	……	1
あなたの時間が動き出すまで	警察署勤務	巡査長	……	4
未来へ繋ぐ架け橋	警察本部勤務	警部補	……	7
『感謝される』ということ	警察署勤務	巡査長	……	10
行動なくして被害者支援なし	警察署勤務	巡査部長	……	13

警察では、

◎ 警察に対する相談については、各都道府県警察の総合窓口につながる

警察相談専用電話「#九一一〇」番

◎ 性犯罪被害相談については、各都道府県警察の性犯罪被害相談電話につながる

全国共通番号「#八一〇三（ハートさん）」

により受け付けています。

本当の笑顔を取り戻すために

警察署勤務 巡査部長

「私、将来お巡りさんになるのが夢なんだ。」

Aちゃんは私にこっそり教えてくれました。

Aちゃんは初対面の私に対しても人懐っこく話しかけてくれる、笑顔が可愛らしい小学生の女の子でした。

Aちゃんは、近所に住む男性からわいせつ被害に遭い、被害後、精神的なショックから体調が悪くなり、学校に行けなくなったり、一人で外出を怖がったり、お母さんのそばを離れようとしなないなど日常生活に支障をきたすようになりました。

そんなAちゃんを心配したお母さんからカウンセリングを受けたいとの要望を受け、県警の被害者支援カウンセラーと共に当時新米の被害者支援室員であった私が同行する形で支援に携わることとなりました。

初めてAちゃんとお母さんにお会いしたとき、Aちゃんは笑顔で元氣よく挨拶し、お母さんがカウンセリングを受けている間は楽しそうに折り紙や絵を描いて過ごしており、そこまで精神的ショックが強くないように思えました。

帰る際には「これ刑事さんにあげたい。」と言って、一生懸命作った折り紙の作品を刑事さんにプレゼントした

り、お母さんとカウンセラーに折り紙や絵を見せて説明したりするなど、どこにでもいるような小学生の女の子で、被害者であることを忘れてしまうくらい明るく元氣な印象を受けました。

しかし、カウンセリングを終え、私がカウンセラーにAちゃんの第一印象について話したところ、カウンセラーの印象は「確かに明るく元氣な女の子。でも本当はすごく我慢しているように思える。彼女の描いた絵は、一見明るい世界のようにだけけれど、自分はその世界の中にはいない。不安や孤独の表れかもしれない。」というものでした。

犯罪被害に遭われた方は、恐怖や不安、孤独感、イライラ等様々な感情を抱えています。周囲に心配をかけたくないとの思いから表面上は明るく振る舞ったり、精神的ショックから被害に遭ったことが信じられない、現実と思えない気持ちになったりする被害者もいます。一見、「被害のショックから立ち直った」、「元氣そう」に見えても実際は様々な負の感情と戦っているのです。

また、心身ともに未成熟な子供が被害に遭った場合、心理的影響は大人に比べて非常に大きくなります。子供は自分の感じている辛さを大人のように表現することが難しく、結果的に一人で抱え込んでしまい、心の傷が深くなってしまう危険性があります。

子供が被害により心の傷を負った場合、特有の反応があり、それは、「親のそばを離れようとしなない」「一人で眠れない」「指しゃぶり・おねしょをする」等の反応で「退行」

と呼ばれます。このような場合には「大丈夫だよ。」と子供が安心できる声かけをしながら、大人が落ち着いて接することで、子供も落ち着きを取り戻していきます。

Aちゃんは一見明るく元氣そうに見えましたが、「一人で外出ができなくなる」「腹痛」等のストレス反応や、「以前よりお母さんにべったりくっつきたがる」等の退行反応が見られ、心理的危機の状態にあるサインを発していました。あの笑顔で元氣な姿は、「お母さんに心配をかけてたくない」との思いから小さな体で気丈に振舞う彼女の必死の姿だったのです。

そして、その後もAちゃんの体調不良は続き、Aちゃんとお母さんのカウンセリングはしばらく継続することになりました。

犯罪被害に遭うということは、被害者だけでなく被害者の家族も傷つき、多くの負担を強いられることとなります。

Aちゃんのお母さんも、日々の家事や子供たちの世話に加え、一人で通学できなくなったAちゃんの学校の送迎や病院への付き添い等のサポートだけでなく、警察への捜査協力や加害者側とのやり取り、また、加害者と家が近所であったため住み慣れた家を引越せざるを得なくなる等の負担を強いられることとなりました。

このように、被害者やその家族は犯罪による直接的な被害の他にも様々な二次的被害に苦しめられます。

二次的被害には、被害時の状況を繰り返し考えてしまうことやイライラや不眠、集中力の低下等の「精神的苦痛」

や、めまいや頭痛、食欲不振、倦怠感等の「身体の不調」、被害によるけがの治療費やけがや精神的ショックから休職を余儀なくされる等の「経済的負担」、捜査協力や公判出廷等に要する「時間的負担」等があります。

Aちゃんとお母さんもこれらの二次的被害に苦しめられていました。そんな中、Aちゃんのお母さんは警察の被害者支援制度を利用し、また、民間支援団体の被害者支援センターや被害者支援に精通した弁護士からの様々な支援を受けながらAちゃんを支えてこられました。

このように「魂の殺人」とも言われる性犯罪の被害者に対する支援は、様々な関係機関・団体との連携が非常に重要です。警察だけでは被害者や家族を支えることはできません。

Aちゃんのお母さんは周りの支援を受けながら少しずつこれまでの生活を取り戻し、カウンセリングを受けることで心の安定を図れるようになっていきました。

お母さんが安定すると、Aちゃんにも変化が見られるようになりました。事件後は腹痛で学校を休みがちでしたが、元気に学校に行けるようになりました。自宅でも弟とのケンカが減り、お母さんにべったりしていた「退行反応」も無くなりました。

Aちゃんとお母さんに一定の回復が見られたことで、カウンセリングも終了することになりました。

最後のカウンセリングの日、お母さんがカウンセリングを受けている間、いつものようにAちゃんと私が折り紙をして遊んでいると、ふとAちゃんが「私、事件の前は薬剤

師になるのが夢だったんだけど、今は将来お巡りさんになるのが夢なんだ。」と話してくれました。

私が「なんでお巡りさんになりたいの？」と尋ねると、Aちゃんは「事件に遭ったのは嫌だったけれど、刑事さんとかほかのお巡りさんたちがとても優しくしてくれて嬉しかったから。私もそんな仕事がいい。」と恥ずかしそうに話してくれました。

私は当初から「Aちゃんはカウンセリングがなければ警察署になんか行きたくないと思ってるのでは」と思っていたので、その言葉を聞いて非常に驚きました。

私はずっとAちゃんが負った心の傷を私たち警察官が癒やすことはできないと思っていました。むしろ警察官は被害者をさらに傷つけてしまう存在であるとさえ思っていました。警察官の姿を見たら嫌でも被害のことを思い出し、しまし、事件の詳細を聞かれ、再現等の捜査協力をすることはとても苦痛なことです。

このように捜査や警察官の言動等により苦痛を与えることも二次的被害になります。

捜査上必要なことであるので避けられない部分もあると思いますが、そのような性質上、警察官が被害者支援をするという難しさを私はずっと感じていました。

性犯罪被害に関しては羞恥心から被害者が届出をちゅうちよしてしまうこともあります。

それでも、「これ以上自分のような被害者が出てほしくない」という思いから、勇気を出して被害申告をし、捜査

に協力してくださる被害者の方もたくさんいます。

私たち警察官は、被害者がどれだけ辛い思いをして警察に助けを求めているのかを忘れてはいけません。

捜査を進めるばかりでなく、被害者の心情や体調を気遣い、警察官が被害者に対して二次的被害を与えることのないように十分に配慮することが重要です。

担当の刑事や警察署の被害者支援担当者がAちゃんに寄り添い、Aちゃんの声に耳を傾け、適切な支援を行ってきた結果、Aちゃんの不安を取り除き、傷ついた心が少しずつ癒やされ、Aちゃんにとって「警察Ⅱ事件」ではなく「警察Ⅱ将来の夢」になったのだと強く感じます。

まだまだ私には満足のいく支援ができる自信はありませんが、Aちゃんとの出会いによって、自分が警察官として被害者にどう寄り添うことができるのかを知ることができました。

自分の存在が、被害に遭われた方にとって少しでも役に立てられるように、「勇気を出して警察に相談して良かった。」と思っ貰えるように、被害者に寄り添った警察官でありたいと思います。そして、1日でも早く被害者が本当の笑顔を取り戻せることを願いつつ被害者支援を行っていきます。

最後のカウンセリングの日、Aちゃんは一生懸命作った折り紙のお花を私に渡し、「またね!」と言って帰っていききました。

「Aちゃん、いつか一緒に仕事できる日を楽しみに待ってるよ。ありがとう。」

あなたの時間が動き出すまで

警察署勤務 巡査長

それは、まだ冬の厳しさが残る三月未明に起きた。

深夜二時頃だったろうか、強制性交等致傷発生を告げる無線がけたたましく鳴り響き、あらゆる情報^が錯綜する中、現場に着くと、友人に付き添われ、静かに泣いている女性がいた。二十歳代の小柄な女性で、少女と表現してもいいような子だ。私は戸惑いながら声を掛け、その後、警察署で話を聞くことにした。

「犯人は、この人なんです。」彼女は、スマートフォンで、あるサイトを開くと、私に見せてくれた。

ドラマ等では、「正義の味方」として描かれることが多い職種^の男であり、私は思わず言葉を失った。

彼女は、華奢な肩を涙で震わせながら、知り合ったきっかけや、被害状況について、少しずつ話し始めた。

まだあどけなさが感じられる話し方や表情、キレイにメイクされた目元に残るあざが痛々しい。「弱者の味方」であるべき職種^の男による犯行、詳細を知ることには、どんなに怖くて辛かっただろうと胸が痛くなった。

彼女は、「まさかこの職業の人がこんな酷いことをするなんて思わなかった、絶対に捕まえてほしい。」と泣きながら

話している。私は「絶対犯人を捕まえます。そして絶対あなたの力になります。」と誓うと、彼女は力なく微笑んだ。

発生から程なくして、被疑者は逮捕された。

被疑者はなんとも悪質なことに、他の女性にも同様の犯行を行い、緊急逮捕されると、捜査一課を中心とした帳場が立ち上がり、私はそのメンバーとなった。怒濤の様な裏付け捜査を積み重ねながら、あつという間に数日が過ぎ、彼女を被害者とする事件の着手日が決まった。

私は久しぶりに彼女に連絡を取り、被疑者が逮捕されたことや今度は彼女を被害者とする事件に着手し、再逮捕予定であることを告げたが、彼女の声は暗かった。

「被疑者を捕まえたのに、彼女なんだか暗かったんですよね。」何気なく話す私に、帳場の上司は諭すように言った。

「被疑者を逮捕して、起訴されるように捜査すること、当然それは大事だよ。でもね、性犯罪は「魂の殺人」と呼ばれてるんだ。被害者は、犯罪に巻き込まれたことで、何年も苦しむ。その苦しみは、一生続いてしまうかもしれない。人間不信になったり、被害を思い出して、怖くて家から出ることができなくなったり、自分が汚い人間だと思つて、自傷行為を繰り返してしまう人もいる。彼女は勇気を持って被害申告をしてくれたんだ。だから俺達は彼女の勇気に敬意を表し、寄り添い、苦しみや辛さを一緒に背負つて、同じ歩幅で歩かないと。そして、それができるのは、彼女の1番近くにいる俺達刑事だけだ。」

私は、頭を後ろから強く殴られたような、今までの自分

の価値観が一気に崩れ落ちるような、そんな衝撃を受けた。被疑者を逮捕することは、当然ながら一番の解決手段で、でもそれだけでは、被害者の方々の心の傷の全ては癒えない。

誰かの力になりたくて、誰かを助けられる私でありたくて刑事を志したのに、なぜ気が付けなかったのだろう。彼女の優しく繊細な性格を考慮すると、泣き寝入りをしてしまってもおかしくないのに、一歩踏み出してくれている。

その一步には、どれほどの勇気が必要だったのだろう。同性だから、私が一番彼女を理解できる、なんて思っていた自分が恥ずかしい。

私は「寄り添うって何をしたらいいんでしょう。」と質問した。

すると、帳場の上司は、「何でもいいんだよ。会って話をする、電話をすること。話だつて事件のことだけじゃなくていい。世間話とかでいい。自分を心配してる人がいるって、自分は1人じゃないって知るとは、すごく救いになるんだ。」と言われた。

私は、なんだか居ても立ってもいられなくなって、早く彼女に会って、顔を見て、私はあなたの味方だよと直接伝えたくて、連絡を取ると、幸い家にいるとのことだったの、すぐに会いに行った。

彼女は、「えー急にどうしたんですか。」と驚きながらも、私の突然の来訪を快く迎え入れてくれた。

私は、被疑者が別件事件で逮捕されたこと、今後再逮捕すること、何でも頼ってほしいことを改めて説明した。

すると、彼女は伏し目がちに「犯人が捕まったのはよかったですけど、あれから少し落ち込みがちなんです。」と言った。

私は悩んで、「あなたを一人ぼっちにしたくない。でも、理解不足で力になりきれない部分が出てくるかもしれない。県警には、被害者支援の専門スタッフもいて、その人達が話を聞くこともできるし、カウンセラー等も紹介できる。だから、何でも相談してほしい。」と話すと、彼女は暗い表情のまま、黙って頷いた。

数日後、県警のカウンセラーから連絡が来た。彼女から、カウンセリングの依頼があったそうだ。当初、そういった支援を拒否していたので、少しほっとしていた矢先、カウンセラーの方が業務時間外に、突然来署したのだ。何が起きたのだろうと、驚きながら話を聞くと、彼女が、精神的に不安定になり、仕事も辞め、家から出ることもできず、実家から母親が来て付き添って生活しているらしいとのことだった。

カウンセラーの方からは「不安定な状態だから、万が一も考えて、今は、母親以外接しない方がいいかもしれない。」と説明を受けた。

素人の私には、被害者支援なんて無理なのではないだろうか。自問自答の日々が続き、カウンセラーの方にアドバイスを仰ぐと「真摯に向き合っていれば、思いや熱意は伝わ

るはずだから。」と励まして頂き、すぐ心が軽くなった。

少し時間を置き、彼女に連絡をしてみると、彼女は、「最近は少し落ち着いたかな。」と言っていたので、その後も折りをみては、電話したり会いに行くことを続けた。毎回何を話すわけでも、何か特別なことをしてあげられるわけでもなかったけれど、少しずつ笑顔が見れる回数が増えた。

しかし、帳場が終結したことや、彼女が再就職をして忙しくなったことで、連絡や会いに行く頻度は落ちていった。発生から一年が経ち、私は、彼女の様子が気になって、思い悩んだ末、久しぶりに連絡を取ることにした。事件捜査は終わって、時間も経過したけれど、変わらずに頼ってほしいという思いを伝えたかったのだ。

突然の連絡にも関わらず、彼女は、私を優しく迎え入れてくれた。そして、新しい職場のことや近況等を話してくれて、忙しいながらも充実した日々を過ごしていることが窺えた。

何より、終始笑顔で話をしているので、私は、だいぶ元気になって良かったと安心し、帰ろうとしていると「ちょっと待って。」と呼び止められた。

なんだろうと思っていると、彼女は、一度部屋の奥に行くと、紙袋を手にして私の元へ歩み寄って来た。

そして、持っていた紙袋を私に「これどうぞ。」と言って、紙袋に入ったお菓子を渡してくれた。

私が甘い物が好きだ、と話したことを覚えていてくれて、私のためにお菓子を用意してくれていたのだ。

驚く私に、彼女は「周りの人達は、警察なんてあてにならないって言う人がたくさんいたの。でもすぐに犯人を捕まえてくれた。だから、皆に、警察はすごいんだよって教えてあげたの。それに何回も会いに来てくれたことが、本当に嬉しかった。ありがとう。」と今までに見たことがない優しい笑顔をして話してくれた。

私は、これまでの思いが報われたような気がした。

安堵感や何とも言えない高揚感が胸がいっぱいになってしまいたい自分を抑えつつ、彼女の気持ちに寄り添えていたのか自信がなかったこと、会うことで事件を思い出させ、辛い思いをさせていないか心配だったこと、傷付けてしまうような言動がなかったか不安だったこと、今後は幸せになってほしいことなどをなんとか話すうちに、言葉に詰まってしまった。

「大丈夫？」彼女は心配そうに私をのぞき込んでくる。

私は、「ごめんねありがとう。」と言った。

いつもとは逆の立場となり、今度は私が泣きながら。

被害者の方々は、事件捜査が終わった後も、人生は続いていく。

これは、忘れてしまいがちだが、大切にしないといけない考えの一つなのだと思う。

だからこそ、今後の人生が少しでも前向きになれるような、そんな支援ができればいいと何度も思った。

私は、被害者の方の心に明かりを灯すような刑事でありたい。

未来へ繋ぐ架け橋

警察本部勤務 警部補

「〇〇高校、合格しました！」

これは、交通事故により妹を失い、自身も大怪我を負った兄の〇年後の言葉である

当時、犯罪被害者支援室に勤務していた私は、その日午後〇時頃、事故の第一報を受けた。しかし、それは「小学生の列に多重衝突された車が突っ込み負傷者多数。現在、病院に搬送中。重傷者もいる模様」というだけで、詳細は全くわからなかった。

私は、すぐさま発生署に向かったが、その道中、遺族講演で聞いたことのある死傷者多数を出した交通事故現場のすさまじい状況が頭を過った。「混乱した状況下で、どんな体制で何を優先して動けばいいんだろう。」考えがまともならず、四十分程の道のりがとても短く感じた。

そして、警察署に着いた私は、この事故がどれほどの事故かということを知らされることとなった。署の玄関付近には、既に多くの報道機関が押し寄せ、署内の動向を探っていた。無線台には警察官が溢れ、情報が飛び交うものの、発生から一時間を超えているにもかかわらず、衝突した車が何台なのか、被害児童が何人いるのかも掌握でき

ていない状況であった。ただ、兄妹で事故に遭った〇年生の女兒が意識不明の重体ということだけは間違いのない事実であった。

そんな中、ある警察官から「意識不明の女兒の両親は兄が運ばれた病院におり、妹のことは何も知らない模様」との報告があった。

私はすぐに上司に「両親を妹の病院に搬送しますが、まずは電話でこの状況を伝えるべきだと思います。」と進言した。過熱する報道下で、遺族が最初に報道から悲惨な事実を知ることだけは絶対に避けなければならないと思ったからだ。

私は車を走らせながら母親に電話をし、「娘さんが重篤な状態です。病院へお連れするので、そこで待っていてください。」と伝えた。しかし、その直後、私の電話に最悪な知らせが入ってきたのだ。

病院に着くと、事故の被害者家族と思われる多くの人がフロアーにごった返していたが、女兒の母親が誰なのかはすぐにわかった。私からの電話を受け、立つこともできず車椅子でうな垂れた状態で玄関にいたのだ。

そんな中、私は最愛の娘の死を伝えなければならなかった。その後、重傷の兄を親戚に任せ、両親と共に悲しみが待つ病院に向かった。病院の待合室では、女兒の祖父が血だらけのランドセルを抱きしめながら肩を震わせていた。その状況を目の当たりにした両親はその場に泣き崩れた。そして、娘と対面すると、廊下にまで、家族の泣き声、嗚咽

が響き渡り、私は胸が張り裂けそうな気持ちになった。

私は今まで、多くの事件の支援を担当し、自分の中で、「こういった場合はこう対応する。これをしたら次はこれをする。」といったマニュアルが頭の中に入っているような気持ちになっていった。しかし、この時は、自分が次にと動いたらいいのか、どんな声掛けをしたらいいのか、頭に浮かぶどころか、目が熱くなり手足が震えていた。

ご遺体を一旦ご自宅に安置させた後、私は家族と共に、兄が入院している病院へ向かった。何も知らない兄に、妹の死を伝えるためだった。妹の死を知った兄は、最初は泣いていたものの、葬儀場では、家族と普通に会話をし、車椅子をうまく操作できないことを笑ったりもしていた。私は、この様子がショックを隠して気丈に振舞っているのだとわかりながらも、私自身が、どこかその表情に救われているのも事実だった。

しかし、彼がどれ程苦しんでいたのか、私は知らずにいたのだ。

当時、事故に関わった被害者は、車の関係者を含めると二十人を超えていた。そんな中、心の不調を訴える人は、ご遺族だけではなかった。自分の体が痛いにも関わらず、一緒に帰っていた友人の死を受け止めることができず、心を病んでいく児童、それを取り巻く家族についても支援をしなければならなかった。

私は、公費負担制度により、多くの民間のカウンセラーにカウンセリングを依頼し、支援対象者に適した環境を整備す

るとともに、送迎もできる限り行った。その結果、少しずつではあるが、それぞれが事故前の普通の生活に近付いている状況が窺えた。それは、亡くなった女兒の兄も同じであった。カウンセリングの送迎の際、聞く言葉は、学校の楽しい日常が多く、サッカーで日焼けした笑顔に曇りを感じることはなく、私は安堵するとともに、いつの間にか達成感すら感じていた。

兄が精神的に回復に向かっていると認められたことや、当時、カウンセリングの公費負担については一年が期限だったため、カウンセリングの打ち切りの時期についても検討が進められることになった。しかし、カウンセラーからは「今でも妹の話は全くしない。そこに話を向けるとはぐらかされてしまう。」と聞かされた。また、兄は地元の中学校ではなく、隣町の中学校への進学を選択していた。

心が苦しくなった。私は、兄の表面的な部分を見ただけで、本当の心には全く近付けていなかった。いや、知ろうとしていなかった。だから、色々なところで出していた小さなサインを、私は見逃していたのだ。私はすぐに、兄と二人で話をする時間を作った。兄は、この時も不安や悲しい気持ちは一切口にしなかったが、カウンセリングを止めるとは一言も言わなかった。私は、これが小学生にできる精一杯の心の叫びなのだと感じた。

そこで私は、市の被害者支援担当者、県と市の保健師、市の教育委員会、小学校の校長や担任、進学する中学校の校長、担任、部活動の顧問、そして兄を一年間見てきたカ

ウンセラ、更には被害者支援弁護士にも集まってもらい、兄の支援について協議を行うこととした。

彼らの多くとは、事故発生当時から、積極的に連携を図り、情報を共有しており、私にとっては行動を起こす際の心の支えであった。その中で出た答えは、市の教育委員会が予算を取り、引き続きカウンセリングを継続するというものであった。大勢の人の「兄に何とか安心して楽しい中学生生活を送らせてあげたい。」という気持ちが導いた答えだった。

兄のカウンセリングは中学を卒業するまで続いた。カウンセラーからは、警察の制度外で行われているものの、兄の状況は定期的に私の元に届いた。回数を重ねる毎に、妹の話をするようになり、当時の辛かったことを話してくれるようにもなったと聞いた。

妹を守ってやれなかった自責の思い。「将来の夢」という作文を書きながら、自分が今生きていることが何より苦しかったこと。そして、後ろから突然車に撥ね飛ばされ、痛みを苦しみながら段々と意識が無くなっていく妹の姿が今もお頭から離れないこと。

涙が止まらなかつた。苦しくてたまらなかつた。私は、兄に何ができたのだろうと思いがち、○回目の命日が過ぎていった。

そして今年三月「〇〇高校、合格しました！」

思いもしない連絡だった。後悔ばかりの自分なのに、何もわかってあげられなかつた自分なのに、それなのに連絡をしてきてくれた。両親からは「カウンセリング、高校に

行っても続けられることになったんです。警察が最初に繋げてくれたから、あの子の安心がこれからも続くんです。」と言われた。高校からは、新たなカウンセラーの元で、前に進むこととなるらしい。周囲の人が今もお、支援を繋げている現状を知り、少しだけ救われた気持ちになった。

私は今回初めて、死傷者多数の事故を担当し、当初は慌ただしさの中、やるべきことを着実にこなすという状況だったが、時間の経過とともに、自分で解決できることが少なくなり、日々、無力感を感じるようになった。支援自体が、荷が重く、自分にできる事など何もないと感じ、無気力になった時もあった。

しかし今回、多くの方から「警察が真ん中で調整してくれたから、私たちは安心して動けた。」と言ってもらえた。警察が被害者やご遺族を支援するためにコーディネート役となり、関係機関に橋渡しすることで、ご遺族にとって未来に繋がる架け橋となり、今を支えていると気付くことができた。

警察だけでできる支援は、やはり限界がある。そんな中、数年経った今でも支援が継続しているのは、事故発生当初から地域にあるネットワークに移行できるよう行政を巻き込み、情報を共有し、全員が心を寄せてきたからである。

私は、これから先、後悔のない支援ができるよう公認心理師の受験にチャレンジした。今後、どの分野で仕事をしようが、このご遺族との出逢いを、そして、警察だけでなく多くの人たちで繋げた支援を、私は忘れることはないだろう。

『感謝される』ということ

警察署勤務 巡査長

『感謝されるために仕事をしているわけではない』

これは、警察官であれば誰しもが考えていることだと思います。

しかしながら、感謝されるということは、我々警察官が、『求められていることを達成した』ということではないでしょうか。

そして、それが言葉や態度として表れたものなのではないでしょうか。

私は、このことについて真剣に考えるきっかけになった出来事がありました。

それは、今年の初めころ、私が特殊詐欺の被害に遭った高齢女性から話を聞き、その女性に、

「今後同様の被害に遭わないためにも、家族には今回のことをきちんと話しておいたほうがよい。」と話したときのことです。

そのとき、その女性は私にこう話したのです。

「息子にはちゃんと話しておこうとは思いますが、息子にはずっと（詐欺に）気をつけておくようにと注意されていたんです。だから、もし詐欺の被害に遭ったなどと息子

に話せば、（なぜ、あれだけ注意していたのにと）怒られてしまうかもしれない、と不安で夜も眠れないんです。」

私はハッとしました。

私はこれまで、被害者から話を聞いても、正直なところ「犯人逮捕に全力を注ぎ、被害者のことは、その家族が支援するべきだ」と、考えていました。

しかしその女性は、被害に遭ったこと以外にも、「被害に遭ったことで、家族にまで責められてしまうのではないかな不安だ」と言うのです。

私も確かに、もし自分の親が同様の被害に遭ったら、「なぜあれだけ注意したのに：」などと、まるで『責めている』とも受け取られかねないような言葉を言ってしまうかもしれないと思いました。

当たり前のことですが、犯罪被害に遭って、一番苦しんでいるのは被害者です。

そして、その被害者から一番最初に話を聞くのは、我々警察官ですから、被害者から話を聞いた後、一番最初に被害者をケアすることができるのも、我々警察官なのです。

その女性の言葉は、

「今、この女性のために何ができるのか」

「この女性は何を求めているのか」

ということを私に考えさせました。

そこで私は、その女性の代わりに、警察官としての立場から、今回の事件がどのような事件であったのか、その女性が今何で苦しんでいるのかを、できる限り丁寧に、わか

りやすく息子さんに話すことにしました。

私とその女性の息子さんに連絡を取り、事件の概要を説明したところ、息子さんは、自分の母親が犯罪被害に遭ったことに驚くとともに、「あれほど注意していたのに」と、とても落胆している様子でした。

私は、

「お母さんから、あなたがいつも自分のことを心配してくれていること、そして、何度も詐欺には気を付けるように注意されていたことを聞いています。」

「だからこそ、今お母さんは、あれだけ息子に注意されたのにと、とても落ち込んでおられますし、注意されていただけに、怒られるかもしれないと心配されているようにです。」

と、お母さんが詐欺被害に遭って苦しんでいること、そして今何を不安に思っているのかを話しました。

さらに続けて、

「正直なところ、私自身もお母さんからこの話を聞いてハッとしたのですが、もし私の親が同じ被害に遭ったとしたら、私は親に対して、『なんで相談しなかったのか』などと言ってしまうかもしれません。」

「もちろん、心配しているからこそ言うのですが、たしかに被害者からすれば、被害に遭い落ち込んでいるところ、家族から『なんで…』などと言われてしまうと、『怒られている』と受け取ってしまうかもしれません。」

と、あくまで『自分であれば』という話し方で、息子さん

に話しました。

そしてその上で、

「ですから、今回お金の被害はありましたが、お母さんの身体が無事であったことは良かったので、まずはそのことだけでも良しとして、優しい言葉をかけてあげてください。」

と、できる限り丁寧な言葉で、被害者の気持ちを考えて話しをしました。

そうしたところその翌日、息子さんから私宛に、

「昨日はありがとうございました。母には、『大変だったな、今はゆっくり休んでくれよ』と声を掛けました。」

「もし刑事さんから話しを聞いていなければ、私は母のことを責めていたかもしれません。本当にありがとうございました。」

という、感謝の電話がありました。

さらに、その電話の直後、今度はその女性から私宛に、

「刑事さん、息子が昨日電話をしてくれて、『刑事さんから話を聞いたよ。大変だったな、今は疲れているだろうし、まずはゆっくり休んでくれよ』と言ってくれたんです。」

「ずっと不安で眠れなかったのですが、息子があんな優しい言葉を掛けてくれたので、涙が出そうでした。刑事さんが息子に丁寧に説明してくれたんですね。本当にありがとうございました。」

という、感謝の電話があったのです。

私は、自分のしたことが間違いでなかったと安心したのと同時に、今回のことで、

被害者は、警察に対して『犯人の逮捕』だけを

求めているわけではない

ということを学びました。

被害者はときとして、自分自身のことを責めてしまうことがあります。

しかし、そういった被害者の苦しみや痛みをケアし、和らげることができるのは、家族だけではないのです。

それは、様々な事件に触れ、様々な被害者を見てきた我々警察官にもできることであり、それもまた、被害者が『警察に求めていること』でもあるのです。

そして、今回のことで、そういった被害者が警察に求めていることを達成することにより、被害者から我々警察に対して、自然と『感謝』が生まれるのだと考えさせられました。

ですから私は、これからも『感謝されるため』を目的に仕事をするのではなく、結果として『感謝される』仕事をしていきたいと思えます。

行動なくして被害者支援なし

警察署勤務 巡査部長

蒸し暑いある日の夜、当直時間帯に入ってから刑事事案は何もなく、平穏な時間を過ごしていた。

午後九時を過ぎ、刑事当直員で執務室の掃除をしていたとき、突然、慌ただしく無線が鳴り響いた。

「〇〇本部から〇〇、強制わいせつが入電中……」

その瞬間、緊張という糸がピンと張り巡らし、その場にいた誰もが手を止め、無線の一言一言を確認するかのようになり入った。

刑事当直員に女性警察官は私一人。当然、私が当直時支援要員として事情聴取等に付き添うこととなるのだが、普段は薬物捜査に従事しているため、被害者支援とはあまり関わりがなく、今回支援要員となるのは初めてだった。

現場へ直行中も、先着の警察官から

「被害者は自転車で帰宅途中の高校生で、犯人は逃走中」

「服を脱がされ……」

などの被害状況が次々に報告される。

それらの情報を耳にするだけで、被害者の恐怖が容易に想像でき、私自身、最初に掛ける言葉を何にしようかなど

と悩みながら現場へ向かっていると、街灯もない漆黒の暗闇の中に一点だけ煌々と灯りが遠くに見え、近づくとつれ、赤色灯や前照灯の無数の明かりだと分かった。

現場に到着した。

複数の警察車両に囲まれて、一台のワンボックスカーが駐車されていた。

どうやら被害者から連絡を受けて駆け付けた被害者家族の車であり、私は先着した警察官に案内され、後部座席のドアを開けた。

中にいたのは、後部座席の足元部分にうずくまるようにして体を丸め、震えている女の子だった。

「ただ、これだけ怖い思いをしたのか、どれほど傷ついたのか……」

私は、どんな言葉よりも、抱きしめて背中をさすってあげたかった。

しかし、私は警察官で、犯人の痕跡を消すようなことはできない。警察官と一人の女性としての立場がせめぎ合う。

そして出た言葉が、「怖かったね、もう大丈夫だからね。」の一言。身の安全を伝えることで精一杯の自分がいた。

その後は他の捜査員と協働して鑑識活動や事情聴取を行い、犯人の卑劣な犯行が明らかとなった。

事件発生から数日後、被害者と一緒に現場付近で確認しなければならぬことがあり、私は引き続き支援要員として従事することになった。

通学のため毎日通っていた道を、あれ以降一度も訪れて

いない被害者に対し、現場確認を依頼すると、当たり前のことだが、被害者は不安そうな顔をしながら、「犯人を捕まえるためにも頑張ります。」と承諾してくれた。

被害現場に近づいた。被害者は俯いて苦しそうに見えたが、そんな時パトカーとすれ違った。

今回の事件の警戒を行うパトカーだったのだが、被害者は「また何かあったんですか。」と小声で呟いたので、私は「今回の事件の犯人を捜してるんだよ。警察官はみんな味方だからね。」と声を掛けると、被害者は安心したような、嬉しそうな、今まで見たことのない顔で涙を流していた。

現場付近での確認作業が終わり、警察署で飲み物を差し出したところ、緊張や混乱からか、当初、自分のことをあまり話さなかった被害者の緊張が緩和されたのか、少しずつ学校のことや部活のこと、好きなアイドルのこと、好きな漫画のことを話すようになってくれた。

将来の夢を聞くと、「臨床心理士に興味があるんです。」と笑顔で話してくれた。

数日が経ち、今度は犯行再現を行うこととなり、被害者に事前に犯行再現の説明をするとかかなり不安そうな表情をしたものの、いざ始めると、被害者は力強い真っ直ぐな目で、被害内容を記憶の範囲でしっかりと説明していた。

彼女が頼もしく見えた。

犯行再現が終わり、男性捜査員が退室し、二人きりになり、声を掛けると、被害者は静かに涙を流していた。

彼女は強がっていただけだったのだ。私はハッと、

「当然だ。まだ事件から一週間程度しか経っていない。いや、時間が解決するなんでものじゃない。まさに魂の殺人、一生心に傷を負ったのだ。」と思うのと同時に、気付けば私は被害者を抱きしめていた。

事件発生のあの日に、してあげたかったこと。被害者は私の胸の中で、静かに泣いていた。私は言葉もかけずに、ただ被害者の背中をさすった。

事件発生から約二週間後に犯人は逮捕され、被害者に連絡したところ、「こんなに早く捕まるなんて、ありがたうございます。これからどうなるんですか。」と不安を口にした。

また、被害者はこの頃、事件の影響により学校で男性教師にも怯えるようになり、意識を失うなどのことがあったと聞いた。

捜査担当の係長に相談したところ、係長から「行動なくして被害者支援なし」という言葉をもらった。

さらに、カウンセリング制度や犯罪被害者支援センター等について詳細に教えてもらったので、被害者に説明したところ、被害者は支援センターからの支援も受けることになった。

また、私は、被害者の心情に配慮してもらうため、検察庁に対して、女性検事及び女性事務官による聴取の依頼を行ったところ、実施してもらえないことになった。

他に何かできることはないだろうか…

不安になりやすい夜間でも相談を受けられるように、公

用携帯を貸与してもらいショートメールで不安や悩みを聞いた。

気付けば警察官としての業務ではなく、一人の人間として、被害者が少しでも早く日常を取り戻せるようにと一心で向き合っていた。

犯人は起訴され、後日、被害者の母親から「娘が○○さんに話したいことがあると言っていました。私にも教えてくれないので、聞いてもらっていいですか。」と言われた。やっぱり裁判が怖いんだろうか、それともカウンセリングについてか、などと思いつつながら、被害者に電話した。

「お母さんから聞いたよ、どうしたの。」

「あの、私：警察官になりたいです。」

全身の鳥肌が立つのが分かった。

被害者は、警察の各種捜査、検察庁での事情聴取、裁判などでも、時間的・経済的・精神的な負担を受けているに違いない。

今回もそうだ。

私は、支援要員として被害者のために何ができたのか、何が正解なのかも分からなかった。

彼女と会ったり連絡を取ったりすることで、事件のことを思い出し、辛い思いをさせるのではないかなどと思いつつ、どう接していいか分からなくなる瞬間もあった。

ただ、「行動なくして被害者支援なし」の言葉を信じ、勇気ある声掛け、各種制度の積極的活用により、被害者の

心を動かせたことは、私の警察人生において、大きな財産となった。

被害者のおかげで、私も強くなれた。

